2022年度日本語教育学会春季大会
大会若手優秀発表賞（口頭発表）　受賞コメント

大竹春菜（筑波大学大学院生）

この度は、大会若手優秀発表賞を授与していただき誠にありがとうございます。このような栄えある賞を頂けるとは思いもよらず、畏れ多くありながらも大変嬉しく思っております。

本発表は、タイの中等教育機関で日本語を履修している高校生の学習意欲の変動と影響要因に焦点を当てたものです。2021年8月から9月にかけてタイ人高校生440名（14校）を対象に質問紙調査を行い、学習意欲の度合いや日本語科目の興味度等についての回答を得ました。分析の結果、学年が上がるにつれて「高意欲維持群」が減り、「意欲低下群」の割合が増えていることが確認されました。そして因子分析により「日本語習得への興味・価値認識」、「教師の授業スタイル」、「上達への期待と実感」、「低負担」の4因子に対して肯定的な認識を持っている学習者ほど高い意欲が維持されやすく、否定的な認識が強い学習者ほど意欲が変動しやすいという可能性が示されました。

タイは日本語学習者の約8割を中等教育段階の学習者が占める国です。国の教育政策により多くの中等教育機関で第二外国語科目が開講されており、その選択肢のひとつに日本語があります。日本語学習者の増加は嬉しいことですが、内情としては、卒業に必要な科目だからと義務的に履修していたり、本人の意思によらず成績等の基準で日本語コースに振り分けられていたりと、非自己決定的な理由で学び始める学習者も少なくないと聞きます。授業以外の場で日本語を使う機会や見込みがなかなかないことも相まって、動機づけが希薄な学習者の意欲をどう高めていけばいいのかということは多くの教師が頭を悩ませ、関心を持っている問題なのではないかと考えております。私自身も2019年度にタイの中等教育機関で日本語アシスタントを努め、日本語科目をタイの高校生にとってより魅力的で意義あるものにするために母語話者である自分に何ができるのだろうと考えました。それにあたり、まずは現状タイの高校生が日本語学習についてどう考えているのか、どのようなニーズがあるのかを知りたいと思い、本研究に至りました。

受賞のお知らせを頂いた当初は信じられない思いでいっぱいでしたが、徐々に嬉しさが込み上げてきました。研究の面では未熟な点が多く、初めての日本語教育学会での発表に不安な気持ちもありましたが、発表に至る過程や当日の議論の中で多くのことを学ぶことができました。さらに賞を頂けたことで、今後の研究や教育活動に向かう上での自信にもなりました。研究をご指導くださった関崎博紀先生をはじめとする筑波大学の先生方、調査にご協力くださった皆様、発表をご覧くださり示唆に富むご意見・ご質問を投げかけてくださった皆様、そして大会委員の先生方に心より感謝申し上げます。

今後は研究を続けながらタイの中等教育機関にも勤める予定です。タイに限らず、海外の中高生が日本語学習を通してより広い世界に興味を持てるような、中等教育に合った日本語教育スタイルの構築に向けて研究・実践に励む所存です。改めて、この度はありがとうございました。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

＊大竹氏の2022年度春季大会における発表要旨は3頁目にてご覧いただけます。

2022年度日本語教育学会春季大会
大会若手優秀発表賞（ポスター発表） 受賞コメント

加藤伸彦（東海大学大学院生）

この度は名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。

本発表は、社会文化理論の観点から教室談話を分析する研究の一環として、教師とある学習者が話している際に、その学習者を他の学習者が母語で支援する発話を分析したものです。具体的には、支援される側の学習者に言いよどみや沈黙など、発話や応答の困難さが見られた後に、その学習者への他の学習者からの支援する発話を分析し、①内容の教示，②活動の指示，③教師の発話の翻訳，④言語に関するメタ的説明の４つに分類しました。各項目の定義は、①は「学習者が発話または書字する内容を教える発話」、②は「学習者がとるべき行動を指示する発話」、③は「教師の発話を直訳または直訳に非常に近い形で翻訳した発話」、④は「目標言語について説明する発話」としました。

社会文化理論は人々が言語や道具を媒介として行う社会的行為によって、知識が構築されると考える教育・学習理論です。そのため、社会文化理論に基づく第二言語習得では、フィードバックやスキャフォールディングなどの教室内で行われる社会的行為を記述・分類し、教育・学習への活用を目指すことが行われています。これまでの日本語教育における教室談話研究においても、教師や学習者の発話の記述・分類は行われていましたが、教育・学習理論である社会文化理論に基づく研究を行うことで、社会的行為の記述・分類からどのように学習者が知識を構築しているのか、教師はそのためにどのようなカリキュラムを組み、どのような教室活動を行うべきか、といった教育・学習への活用ができるようになると考えております。

本発表の４分類は、そのための萌芽的研究です。今後は支援の発話が起きる要因やその過程、具体的にはどのような場面でどのような支援の発話が起きるのか、そしてその発話は知識の構築にどのように働いているのか、といったことを研究することで、教育・学習への活用につなげていきたいと考えております。例えば、学習者間での互恵的な支援の発話が起きやすい教室風土の作り方、といった成果につながりうると考えます。

ただ、このような成果を出すには、多くのデータと分析の蓄積が必要です。社会文化理論に基づく教室談話分析に関心を持ち、志を共にする方と研究成果を蓄積していくことができれば幸甚です。

最後に、ご指導くださいました元田静先生、加藤好崇先生をはじめとする東海大学の先生方ならびに院生の皆様、研究活動相互支援検討会の皆様、学会でご質問・ご意見をくださいました皆様、そして研究にご協力くださった関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

＊加藤氏の2022年度春季大会における発表要旨は，次頁にてご覧いただけます。

〔2022 年度日本語教育学会春季大会（オンライン開催，2022.5.22）口頭発表⑲〕

タイ中等教育機関における日本語学習者の学習意欲の変動と影響要因

―日本語専攻の高校生に対する質問紙調査から―

大竹春菜

本研究は，タイの中等教育機関で日本語を学ぶ高校生の日本語学習意欲の傾向を探り，それに影響を及ぼす要因と「学習者不熱心」の実態を明らかにすることを目的としたものである。タイ人高校生 440 名（14 校）を対象とした質問紙調査の結果，協力者の 8 割は高意欲群に，2 割は低意欲群に分類され，高い意欲を持っている学習者の方が多いという結果が示された。変動に関しては，学年が上がるにつれて意欲が低下する傾向が見られ，高校 3 年生の 4 割以上が学習意欲の低下を経験していた。学習意欲に影響を及ぼす要因について探るため 36 項目からなる尺度を因子分析したところ，22 項目・4 因子構造が見出された。「日本語習得への興味・価値認識」「上達への期待と実感」「教師の授業スタイル」「低負担」という因子が抽出され，これらに対する肯定的意識が強いほど学習意欲が高く維持されやすく，否定的意識が強いほど意欲が低下しやすいということが示唆された。

（筑波大学大学院生）

〔2022 年度日本語教育学会春季大会（オンライン開催，2022.5.22）ポスター発表⑥〕

教師とのインターアクション時に起きる学習者間の母語による「自律的な自発的発話」

―社会文化理論から見た支援の諸相―

加藤伸彦

本発表では日本語教師 1 名と日本語学習者 2 名の授業内の会話で起きる，学習者が他の学習者を支援するために母語で行う発話（以下，母語による「自律的な自発的発話」）の機能面からの分類と，それが発生する文脈の分析を報告する。これは、第二言語学習は言語等の記号体系が媒介手段として用いられる相互作用の中で発生するため，学習者の母語も学習のための媒介手段と見なす社会文化理論に基づく。

まず母語による「自律的な自発的発話」を機能面から，①内容の教示，②活動の指示，③教師の発話の翻訳，④言語に関するメタ的説明の 4 種に分類した。次に母語による「自律的な自発的発話」が発生する直前に，支援される側の学習者に沈黙や言い淀み等の理解・応答の困難を示す行為が見られた。これは支援する側の学習者が，他者の理解・応答の困難さを解消するために，母語による「自律的な自発的発話」を用いていることを意味すると考える。

（東海大学大学院生）